

農業委員会だより

第 6 号

発行日：平成28年10月1日

発行：大町市農業委員会

編集：農業委員会だより
編集委員会

大町市大町 3887
TEL 22-0420

OMACHI

大町市



夏の暑さ、冬の寒さ、火災から家財を守る土蔵は古の人々の被災に対する備え、秋の取り入れが済めば、翌年の耕作のために種を確保する蔵としても役立ってきました。

この夏は、とても暑くまた台風が次々と上陸してきました。幸いなことに、大町市を直撃するようなものではありませんでしたが、災害に備える心構えは常に持っていたいと思います。そうすることで、秋の収穫を天の恵みと感謝し、より深い喜びを感じることができるのではないのでしょうか。

経営安定と農村の発展を求めて

農業振興部会長 伊藤 宏 昭



農業協同組合法等の一部を改正する等の法律が施行され、農業委員会の組織も大きく変わることになっています。

新しい法律では、事務の内容別に設置していた部会は、区域を区分するものに変更されることから、農業振興部会も今期が最後ということになりました。

現在は13名の委員で構成し、次のような活動を行っています。

地域振興作物としての粟栽培の調査研究及び普及活動

栽培が容易で、高齢者や女性でも収穫・出荷することができます。条件が不利な農地でも安定した収入が見込まれることから、農地遊休化を防ぐ有効な作物として、粟のブランド化を目指して活動を展開しています。生産組合が発足し、

2 haほどの農地に粟を植えました。ほぼ順調に生育していることから、数年後には出荷できる見込みです。

農業情報の提供

地域農業の実態に係る情報から法律、政策、気象、社会動態など、農業を営む上で必要な多種多様な情報を各農家に合わせてきめ細かく提供したいと思っています。

具体的には、各地域の膨大なデータを基に検討し、地域別農地賃借料情報を取りまとめるほか、農作業標準賃金及び機械作業標準料金を算定し、公表しています。

この活動の一環として、全国の農業情勢・最新の農業政策をいち早く知り、農業経営に役立てていただくよう、全国農業新聞の普及活動も行っています。

このほか農業年金の加入推進など、農業経営の安定と農村の発展に寄与する業務を通じて、豊かな暮らしを実現するために活動してまいります。

農家民泊体験



トウモロコシを植える

きていますが、受入農家の確保ができないため、お断りしているケースが多数あると聞いています。

私が受け入れを始めた動機は、松川村の知人から、農家民泊の話聞いて、事業の趣旨に共感を覚えたからです。この事業に参加するには欠くことのでき

ない妻の了解を得て、平成26年度から取り組んでいます。1校当たり、4人から5人の子ども達が1泊2日です訪れ、本年度は、14校に対応することになっています。

子ども達にとっては、あくまでも学習の時間と場所です。このひとときに真剣に向き合い、どのようなことを学び取ってもらおうかと常に考えながら、体験する農作業をアレンジしています。

対面式でバスから降りてくる子ども達は、不安げな表情を浮かべていますが、その反面何かを期待しているようなそんな様子もうかがえます。

子ども達が滞在する限られた時間の中でいろんなことを経験、体験させてあげたい、

いろんなことを話したり、教えてあげたい。長い豊かな人生経験から、時には、相談事にもものつてあげられたらという思いから、寝ているとき以外はずっと、どこでも、何でも聞いていいよと言っています。

このようにして、子ども達と向き合っていますので、限られた時間があつと言う間に過ぎてしまいます。

民泊を終えて帰る子ども達を集合場所まで送っていきませんが、迎えた時とはうって変わって何かをやり遂げたといった達成感、あるいは満足感からかどの子にも明るい笑顔が見られます。その一方で、つかの間の出会いにもかかわらず、滞在した農家の方との別れを惜しむ姿も見受けられます。このような子ども達の姿、表情を見るにつけても、期待に十分応えることができず、純真で真面目な子ども達と接することの責任の重さを感じながら見送っています。

今後、受け入れ農家が増え、より多くの子ども達を受け入れることで、都市と農村との交流がますます盛んになることを願っています。(藤巻 勉)

地域ぐるみで進む、有害鳥獣対策

人と野生動物の住み分け

先日ブルーベリーの収穫作業をしていて、ふと気がつく

と猿の群れが入り込んで果実を食べていました。2メートルほどの高さのネットを設置してあったのですが、それでも侵入し、追い払うとネットを飛び越えて逃げていきまし

た。近頃の猿は大胆不敵です。果樹の幼木が若葉を鹿に食べられて枯れたとか、田んぼの稲が猪に踏み荒らされたとか山沿いの農地ではこれまであまり聞いたことのない被害を耳にするようになりました。

以前から、カラス、ネズミなどによる作物への被害は頭痛の種でしたが、猿や熊の被害に加えて最近では鹿や猪など動物の種類が増えていきます。雪が少なくなると、喜んでいるのは、人間だけではないようです。人里付近に出没する動物は、豊富な餌のおかげで増え、人間に対する恐怖も薄れてきているようです。

大型の野生動物の場合は、農作物への被害だけでなく、人間に危害を加える恐れもある

も行われていますが、安心して暮らすためには被害を受けないようにすることも重要です。

被害の少ない作物を選ぶという方もいますが、現状では、頻繁に被害に合う農地は、放棄されてしまうことが多く、そこが新たな餌の供給場所となつて生息場所を拡大する悪循環も生まれています。

人里近くでは、餌を探すとが困難で、追い払われるなど不愉快な経験をすることを野生動物に学習させる必要があるといわれています。

昨年、泉地区では、農地の多面的機能支払を利用して、西側の山沿いに2・5キロメートルの電気柵を設置しました。この効果は高く、これまで被害に悩まされてきた山沿いの農地では被害がほとんどなくなりまし

た。そこで、高瀬川沿いに電気柵を設置することにしました。これで野生動物と人間の

住み分けをする境界が明確になり、人里付近に住む動物が減ることを期待しています。

このように、地域全体を電気柵で囲むことは難しいかも知れませんが、住民が協力して、収穫しない作物や野菜くずなど、野生動物の餌となるものを放置しないこと、ネットを張ったり周囲の草刈をしたりすることで作物に近づきにくい環境を作ること、動物と出会ったら追い払うことなど共通の理解を深め、実践することで有害鳥獣の被害を軽減することができ

(荒井正規)



電気柵を張る泉地区住民の方

生涯の伴侶に出会う機会

「花嫁花婿銀行」

農業委員会では「農業後継者花嫁花婿銀行」を設置し、登録制による結婚相談を実施しています。

結婚相談は「お嫁さんをお婿さんを」と望む方はもちろん「お嫁さんにお婿さん」という方のご相談を頂戴し、候補者などの情報提供やご紹介をさせていただく場としてご利用いただけたらと思います。

結婚というものは、いざし

「いつか結婚できる」「いつか良い人が現れる」と思っている方も、なかなか出会いが訪れるものではありません。「職場に異性がない」とか、「仕事が忙しくて出会うチャンスが無い」と嘆くだけで、何もしなければ何も変わりません。

私たち「農業後継者花嫁花婿銀行」は、理想の相手と巡り合えるよう、心を込めてサポートいたします。

結婚相手を見つけようと思えば、まず異性と知り合う機会を少しでも多く持つことです。

花嫁花婿銀行には、大町市の方を中心に多くの方が登録されていますし、全て身元のしつかりとした方なので、安心して自分にピッタリの方と出会う機会を探すことができます。

またお気軽にご相談できるよう、平成24年度から専門相談員を配置し、「結婚相談所」を開催しています。毎月、第2・第4土曜日、午後1時から5時まで、大町市総合福祉センターの二階小会議室にて行っております。事前の申し込み等は不要ですので、一人でも多くの方がお幸せになるよう皆様のご相談をお待ちしております。

(専門相談員 滝澤多恵子)



どぶろく&飼料米で販路を拡大

先進地新潟で視察研修

8月22日、23日の2日間、新潟県上越市と魚沼市に行つてまいりました。

上越市では、「どぶろく」を造り、民宿の売りにしている、その名も「どぶろく荘」の、中川さんのお宅にお伺いしました。

この地区は、大町市の中山間地よりも傾斜があり、棚田が主流で、生産者の高齢化が進み荒廃地が増えていました。そこで集落営農法人を立ち上げ、中川さんが代表者を務めています。皮肉なことに、特区でのどぶろく生産は、自分で作った米を使い、自分の営業所で提供することが要件

となるため、ご本人の農地は法人に貸すことができないのだとか。

民宿経営も、どぶろくを造りたいがために、奥さんを説得して始めたのだそうです。

杜氏の経験を生かして造られるどぶろくは、芳醇な香りと濃厚な味わいがありました。

魚沼市では、自給飼料生産組合の活動を研修しました。

この組合では、「こしひかり」・「こしいぶきなど、主食



どぶろくの発酵タンクを前に中川さんの説明を聞く

米を飼料米としても、出荷しています。飼料米の受け入れ、契約畜産農家への配送を、農協が一手に担っています。収入面では、県・市からの補助等を使い、生産農家の理解を得て、システムを確立したそうです。

ブランド米の誇りをもって、厳しさを増す稲作農業をしっかりと支えていく取組に力強さを感じました。

(鷹巣夕子)

編集後記

今年の研修視察は、新潟方面に行つて来ました。魚沼市

は、魚沼産コシヒカリで有名です、他には、どんな物が有るのか検索してみました。コシヒカリを始め、そば、アスパラ、笹団子、など四十二品目が魚沼ブランド推奨品紹介のつていました。大町市はどうか調べてみると、農産物、農産物加工品で、リンゴ、信州そば、信州味噌、醤油、凍りもち、手作りジャム、紅花インゲン、信濃大町産米が紹介されていました。もっと沢山の、農産物紹介が出来る様頑張りたいものです。

(水島健治)

担い手紹介

小澤果樹園



小澤果樹園を取材したのは、おりしもリンゴオーナー開園式の日で、園では大勢の方がおもてなしを受けながら、樹を選定していました。関東・関西・中京の方面から、また地元大町市の方を含め、常連の方々がばかりで、美味しいリンゴの収穫が待ちどおしそうに、名札を付けて、写真を撮ったり、園内を散策したり田園風景を満喫していました。

約110年ほど前に、リンゴ作りを始めて、現在は四代目の小澤浩太氏(33歳)が切り盛りをしています。栽培面積は約3haの敷地にシナノ三兄弟をはじめとしてシナノドル

チェ、ピンクレディ(オーストラリア産で栽培するには、契約が必要。日本には、3000本の苗木しか植えられていないそうです。)等、20数種類を栽培し、海外にも輸出しています。

北アルプス山麓、綺麗な水、新鮮な空気、降り注ぐ太陽の光という大町市の地の利を巧みに生かして、自然有機質を使用した低農薬化とイタリア方式の新ワイ化・高密度栽培法を導入し、一粒一粒手塩にかけて大切に育てている農園です。

現在、ウェブショップでリンゴジュースやジャムも販売し

ていますが、この度新商品としてシードル(リンゴワイン)を直売する計画があり、大きな期待を寄せています。

何よりも親の後を継いで大きな夢を持ち、お客様を喜ばそうとする姿に感動し、これからは、認定農業者として誇りを持って、当地特有の農産物の産業化を進める園主にエールを送りたいと思います。先代も新品種を作り出し、リンゴ一筋に40年手がけ、その背中を見て育った現園主は、六次産業化や販路拡大に努め、多くの人々に、この恵みを届けようとしています。

(奥原文登)